
サンタクロースは恋人

卯月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンタクロースは恋人

【Nコード】

N0551D

【作者名】

卯月夜

【あらすじ】

X・masが近づくにつれ、小さな想いは大きくなる。自分に好意を持っていてくれる幼馴染みを目の前に、逃げていた本心をぶつける。『私はあの人が』

プロローグ（前書き）

初めまして。この小説はクリスマス小説企画 クリノベ2007
に参加してます。私以外に四人のサンタ（小説家様）がいます。そ
ちらの小説も是非読んで下さい。よろしくお願い致します。

ブログ

去年のクリスマスに会ったあの人を忘れられないでいる。

無意識にでも確かにあの人を探してる。

でも私はその人の名前も歳も
素顔さえ知らない。

11月17日

あと一月と数日でクリスマス。

クリスマス……私は独りなのかな？

慣れてるはずなのに去年のクリスマスを思い出すと

寂しい……

私のサンタ
もう一度、会いたい。

【幼馴染み】

肌寒い季節になった。

落ち葉が冷たい風に吹かれ舞い続け、吐く息は白い。

通学路を歩く同じ制服を着た集団の中に、マフラーに顔をうずめている女の子がいた。

腰の高さまである髪の上からマフラーを巻いている。

周りでは、おはようと明るいい声が変わされる中、その女の子だけは別世界にいるような冷ややかな表情だった。

「花鈴！」

自分と呼ぶ声に気付いた女の子は足を止めて振り返った。

さっきまでの無表情は変わらなかったが、現実には戻ったようだ。

「……はよ。隆ちゃん」

手を振り笑顔で駆け寄って来た男はズルッとコケた。

「ちゃんは止めい」

さっきまでニコやかだった表情が一瞬で消えた。トボトボとヘコ

ミながら隣に並ぶと、一緒に歩き始めた。

「相変わらず一人か？」

「……… 必要ないから」

溜め息をつく隆一を、うつとおしそうにしている花鈴。

「でもなあ幼馴染みの俺だけって言うのもなんやし………」

「別に……… 私は気にしてない」

ズレたマフラーを直しながら花鈴が言うと、隆一は顔を歪めてポツリとそうかと言った。

「……… お前は……… 何でそうなんやらな。少しは人と生きる事を考えたらどうや？」

「私が嫌なら構わなくていい。隆ちゃんみたく私はなれない」

隆ちゃんは明るくて元気で、頭も良い。ムードメーカー的な存在だから周りに人がたくさんいる。

わざわざ私に構わなくても良い。

「お前な……… オレが何でお前に構うか分かんのか？」

「幼なじみだから」

「それだけとちゃうわ。それに心配してるのにその物言いはめっちゃ腹立つわ」

学校の通学路、たくさんの方がいるのに花鈴にとっては別世界の住民のようにしか思っていなかった。

自分には関係の無い他人。

幼馴染みの隆一だけが唯一の

「……別に……いない」

花鈴は立派すぎる幼馴染みが正直ウザイ存在でしかなかった

【心】

小さい時から家政婦にお世話になっていた。

何日、何カ月、何年と期間は定まっていなかったけど、ずっと同じ家政婦では無かった。

雇う家政婦は親の気まぐれや、相手側の事情で代わった。

好きになっても別れが来る。

必要以上に関わらない。

傷付きたくなかった。

心の自己防衛が、無意識に身に付いていた。親に対しても。

そのせいか一人に慣れ、独りでいる事を望んだ。

幼馴染みの隆ちゃんは

保育園からの付き合い。

すでに心を閉ざしている無感情の私の何が気に入ったのか、明るく話し掛けて来た。

無理矢理遊びに付き合わされ、その明るい自分勝手さが嫌な時もあつたけど

でも私の唯一の友人だと思ってる。

『花鈴』

私の名をちゃんと呼んでくれるのはあなただけ

それが時々暖かく支えになる時もあるけれど

私はあなたのようにあなたが好きではない。

『何でオレがお前に構うか分からんのか？』

分かる。

分かるに決まっている。

幼馴染みとしての付き合いが長いから。

でも分からない。

分かりたくない

私はあなたを愛してないの。隆ちゃん

どうしてもあなたを愛せない。愛したくない。

だから早くこんな私を嫌いになって……

こんな私を見捨てて幸せになって……

それが

それだけが私の願い

願う心も無くした私が今は願う。

どうか

私を嫌いになりますように

ごめんなさい……隆一

【無】

11月27日

テスト週間に入っていた。部活もない。いつもは一人で帰っていた。今は隣に隆一がいる。

「…………でな！先輩が…………」

隣に並んで歩いている隆一は楽しそうに部活の話をしている。

花鈴はそれを黙って聞いている。相づちすら打たず、ぼんやりしなから心の中で寒いなと思っていた。

上の空の花鈴に気付いた隆一は急に黙り込む。
うつすら態度に怒りが出ていた。
でもいつもの事なのか花鈴は何も言わないでいる。

「あのさ…………花鈴」

「…………」

ハアと息を吐き、白い靄を見ながらコートのポケットに手を入れる。

それでも寒いなと花鈴は思いながら、隆一 の存在を忘れかける。

「聞いてるんか？ 花鈴」

「えっ……ああうん」

空返事をする花鈴にムツとする隆一。

足を止めるとしゃがみこむ。

花鈴はそれに気付かず、足を止めない。

二人の距離が開く。

隆一は数秒後、立ち上がった。

「……ッ」

バシッと音が鳴ると花鈴はようやく足を止め、振り返った。

「……」

後頭部が冷たい。隆一に雪玉をぶつけられたから。

無表情に隆一を見ると何も言わず、踵を返しまた歩き始めた。

「花鈴！」

隆一が呼ぶが、花鈴は足を止めない。雪をぶつけられた怒りも表さない。

「花鈴！ お前人の話くらいちゃんと聞けや！ いきなり雪ぶつけられて怒らんのか！」

距離が離れる。自然と隆一の声が大きくなる。

でも花鈴は何も言わない。

「花鈴……お前なあ」

「……別に……」

花鈴がボソリと小さな声で

「隆一に頼んでない。一緒にいてなんて……」

その小さな声が聞こえてしまった。隆一は一瞬悲しそうになると、怒りを露にする。

「頼まれて一緒にいたら友達ちゃうわ！ いい加減にせいや！ 俺はお前が……」

「頼んでない」

プチッとキレた隆一。

「お前なんか知るか！ 好きにせいや！」

そう言つと反対車道に渡って行き、姿を消した。

花鈴はそれを黙って見送るとハアと白い息を吐きながら歩き出す。

たった一人で

【哀】

私がこんなだから隆一とはよく喧嘩をしていた。

大概、次の日に怒りの冷めた隆一がまた明るく何も無かったように話し掛けて来る。

でも今回は違った。

テストが始まり終わっても会いに来ない。今も。

毎日嫌ってほど顔を見ていた。

それは隆一がわざわざ私に会いに来ていたからだと改めて感じた。

でも人として欠陥している私は、たった一人の友人と会えないことすら何も感じなかった。

会いたいとも思わない。
逆に今は穏やかだった。

隆一がいると現実が見えたから、時間の流れが分かった。

それは私にとって生きていえると言つこと。

でも今は周りにどれだけの人がいても独り。

この心地好さがずっと続けば良いと思つてしまつ。

隆一の事を思つと……

胸が痛む。罪悪感。

隆一は私を構うのは私を哀れんでいるからだと思つ。

それも嫌だけど一番重いのは好きだと言つ気持ち。

どうしたつて

私が私のままだと隆一を好きになることはない。

私は隆一の為に変わりたいと思わない。

今の私を受け入れてくれて

私もこの人と歩みたい

そう思える人に私は出会ってしまった。

だから私は

隆一に言わないといけない。

私は

最低な人間だと

【06・12・24】

2006年12月24日

街はクリスマス一色。

店頭でサンタクロースの格好をした人達がチラシや無料プレゼントを配っている。

外にまで聞こえる軽快なクリスマスソング。聞き慣れたその曲はいたる所で流れている。

小さな子供は楽しさから歌い、その光景を微笑ましく見ている家族連れや、恋人、友人。

それぞれ、みんなクリスマスイブを楽しそうに過ごしている。

そんな中、一人で黙々と歩いている女の子がいた。

浮かれた周りの人達は気付いていない。彼女が泣いているのを。

長い横髪で顔を隠し、零れる涙を手で必死にぬぐうと、立ち止まった。

『……花鈴？ お金は足りているでしょ？ あなたももう子供じゃないんだから自分の事は自分でしなさいね』

子供じゃない？ ダカラ
お金？ ソレダケ

仕事がそんなに大事ならどうしてワタシナンカラ

そう思った。

いつもいつもお金お金。子供じゃないって子供の時も家政婦に任せっきりで、親らしい事なに一つ

してくれなかったくせに！

涙が止まらない。思わず家から飛び出していた。クリスマスいつものこと。一人。

雪が降りそうなくらい寒い夜。
明るい街、明るい人達にとっては寒くないのかも知れない。
けど私は寒い。

寒いサムイ寒い寒いサムイ寒い寒い寒いサムイサムイ寒いサムイ
サムイサムイ寒い寒いサ……ムイ

「メリークリスマス」

どうしようもない孤独と、張り裂けそうな辛さでいっぱいになっていた花鈴の耳に声が聞こえた。

花鈴が顔をあげる。少し離れた所、でも視界に入る距離にサンタクロースがいた。

笑顔で子供にプレゼントを渡していた。とても優しい笑顔。

プレゼントを貰った子供は嬉しそうに受け取り。明るくありがとうと言っている。

「……………」

花鈴はしばらくその光景を見ていた。自然と涙は止まっていた。さっきまでの心の寒さも

花鈴はグッと手を握ると下を向いたままサンタクロースに向かって歩く。

真っ赤な衣装のサンタクロースは、目の前から近づいてくる女の子に気付いた。

自分に向かってくる女の子を目の当たりに、何事かとギョツとし

ている。

「ッ」

サンタクロースの目の前でピタッと止まる花鈴。
しばらく硬直状態。

「あ……あの……どうかし……」

思わずサンタクロースが沈黙を破り、訊ねる。

花鈴はゆつくりと目線をあげ、拳の人差し指を伸ばし、サンタクロースをビシッと指差した。

「あなたサンタクロースでしょ？ 子供の願いを叶えるのが仕事なら私の願いも叶えなさい！ 私も子供なんだから！」

息巻いた花鈴は一気に言い終わると、指差していた手を下ろした。

サンタクロースを真っ直ぐ見詰める花鈴。
力が入りすぎて睨んでいるように見える。

たまたま花鈴の視界に入っただけの通りすがりの哀れなサンタクロース。

初対面でいきなり無茶苦茶な事を言う女の子に呆然としていた。
でも少しの間を置いて

「いいですよ。何がお望みですか？」

とさつき子供達にプレゼントを渡していた時の優しい笑顔で言ってきた。

優しい笑顔と口調。欠片も嫌がる素振りは無かった。

「なっ？」

サンタクロースの対応に、花鈴の方が予想外だったのが驚いている。

目をまるくし、口がおもいつきり開いている。

「構いませんよ。何でも言っして下さい」

更に爽やかにそう言われ、頭の思考が止まる。

怒られるか相手にされないと思っていたから。

花鈴はとつさに

「そ……それなら……こ・恋人！」

「恋人？」

「そうよ！ サンタクローズが恋人なんて素敵じゃない」

恋人と言ってしまった。

こんな願い受け入れるはずがない……

馬鹿じゃない？
と言われるのが普通

「いいですよ」

! ! ! ! ! ! ! !

こうしていつも一人だったクリスマスを手クローズと共に過ごす事になった。

【独】

多少の事じゃ動揺なんかしない、けど親の事となると感情が揺れる。

いくらあの留守電を聞いて感情が高ぶっていたからって初対面の赤の他人に

さっきまでの憤りも落ち着いた今は、ただただ恥ずかしい。

こんなに恥ずかしくて穴があれば入りたいと思ったのは初めてかもしれない

「……あの」

花鈴が気まずそうにサンタクロースに、視線を向ける。

派手な真っ赤な衣装と白ヒゲ、かなり目立つ。

今日はクリスマス・イブ。

周りにたくさんサンタの格好をした人達がいる。

今日のこの日、サンタクロースの格好をした人がいても可笑しくない。

でもすぐ隣で並んで歩いていると、気恥ずかしさがあつた。

「何ですか？」

「あの……すみません」

そう言うのがやっとだった。さっきの自分の言動を思い出し、顔は真っ赤になっている。

顔を上げれず、うつ向いたまま。

そんな花鈴をクスッと笑うサンタ。ちゃんと見えるのは目だけ。

素顔はヒゲで隠れている。

サンタの格好、顔も全部は見えない。明日になれば他人。

気が楽になったのか、半ば開き直り花梨はいつもよりお喋りだった。

「あなたの名前は？ 私は花梨です」

「サンタクロースです」

「まさか……サンタクロースで通すの？ 怒ってるの？」

「花梨が望んだから……サンタクロースが恋人なんて素敵？」

ボツと火がついたように一気に真っ赤に。サンタクロースは花鈴の反応を面白がってまたクスクス笑っている。

「わ・分かったわよ。でサンタさんはもうプレゼント配らなくていいの？」

子供達にプレゼントを配ってる時の、優しそうな笑顔を見たらなんだかムカムカして

少し困らせたくなっただけなのに。天罰かしら……ハア

「丁度最後の一個を配り終ったら花梨が私のこ」

「キヤーー！ 止めてよもう」

改めて思うと、とても恥ずかしい発言。

平静を取り戻した花鈴は半泣き状態でサンタクロースの言葉を遮る。

ずっと余裕ありのサンタクロースはニコニコ笑顔を絶やさない。

「今夜はクリスマスイブ。みんなこの日は楽しむものですよ」

そう言いながら花鈴の手を掴み、やや早足でグイグイと引っ張りどこかに向かっていた。

街の中心に近づいてるせいで人波がすごい。

花鈴は、行き先も分からないままサンタクロースについて行く。

ハアとため息をつきながら花鈴がなんの気なしに聞いた。

「ねえトナカイさんはどこ？ サンタさん」

「トナカイですか？ いりますか？」

「いりますかって……」

サンタがポケットから何かを取り出すと花鈴に手渡した。

「トナカイ」

「どうぞ、差し上げます」

小さな小さなトナカイのマスコット。とても可愛い。

「ってトナカイをあげるサンタなんかいない」

「ここにいますよ。良かったですね。恋人がトナカイをあげるサンタで」

「なっ」

「花鈴からはプレゼント無いんですか？」

面白がっているサンタは更に花鈴を困らせ遊んでいる。

「無い！」

「冷たいですね」

サンタが冗談まじりに笑顔で言った。

でも 冷たい その言葉がサンタの口から出たと同時に、ビクッと体を強張らせ、固まる花鈴。

あまり深い意味で言った訳では無いだろうサンタの言葉で、花鈴の顔が曇った。

口数も減り、無表情へと変わる。

「？」

サンタがそれに気が付き足を止めた。しゃがみ込み、うつ向いている花鈴の顔を見ながら優しく聞いた。

小さな子供に対するように優しく接するサンタ。

「……どうしたんですか？」

優しい声、優しい笑顔、優しい瞳

誰にも言った事が無い自分の気持ち、今までの事、悲しさ。

花鈴は思わず口に出していた。

「私は……クリスマス親と過ごした事も……プレゼントを貰った事
すらない。……冷たい……から……私は愛されてない」

震える声、涙のたまった瞳、唇を噛み締め悲しみを必死に堪えて
いる。

「花鈴……」

サンタは優しく花鈴の頭をなでながら少し悲しそうに微笑む。

「花鈴……親が全てじゃない。君には君の大切なものはないの？」

「な……い。そんなの……いない。意味がな……い」

「そう。花鈴には花鈴を心配してくれる人はいないの？ 親以外に花鈴に声を掛ける人はいない？」

「……………」

「花鈴と向き合おうとする人はいないの？」

「い……る……でも私は」

「花鈴、周りが変わるのをずっと待ち続けるのは辛くて苦しい。親が変わるのを待つんじゃない、今、花鈴に声を掛けてくれる人と向き合ってみたら？ どんな相手でも」

「分かん……な……い」

「変わるのを待つんじゃない、花鈴が少しずつ変われば今の場所から抜け出せるよ。親と向き合いたくても向き合えないのは悲しいけど、親が全てじゃない。それに今がダメでもいずれ向き合える日が来るよ。必ず。その為にも、今は 意味がない 花鈴がそう言ったものと向き合ってみたら？ ……ね？花鈴」

花鈴はただ首を左右に振った。

「花鈴……ずっと 其処 にいるの？」

サンタは悲しそうに言うと、立ち上がった。

花鈴の手を取ると再び歩き出した。

人波を掻き分け、無言でひたすら歩き続ける。

進むにつれ道を行き交う人はだんだんと増えていく。

人と人の隙間をすり抜け、手を繋いでいないとはぐれそうな人混みから、満員電車のように人が集っている場所に行き着いた。

「着いたよ」

サンタクロースが立ち止まると指を差す。そこには大きなクリスマスツリーがあった。

サンタの言葉で顔を上げた花鈴の目の前に、天にも届きそうな大きな大きな木があった。

可愛く飾られた木は、イルミネーションがまばゆく光を放ち、とても綺麗だった。

周りにはツリーを見に来たたくさんの人達で埋め尽くされていた。

花鈴はクリスマスいつも一人だった。

こんなにたくさんの中、こんな綺麗なツリーを見ながらクリスマスをごすのは本当に初めてだった。

ポロッ

花鈴はツリーを見上げたまま静かに涙を零していた。

サンタクロースは花鈴の手を握ったまま、涙を流す花鈴の横にいた。

「暖かい……」

花鈴がそつつぶやいた。

花鈴の無表情の顔からは涙が流れ、ツリーを見上げるその姿はとても見ていて切なくなる。

サンタはそんな花鈴の横顔を優しく見詰め、ツリーへと視線を変えた。

高いクリスマスツリーを見上げながら花鈴に一言

「大丈夫だよ」

そう言った。

何が大丈夫なのか花鈴には分からなかった。でも見上げるクリスマスツリーはとても綺麗で、周りの人達は明るく楽しそうで

花鈴にとってそれはとてつもなく暖かった

初めて人を人だと思った。

暖かいと

大丈夫そう言ったサンタクロースが時計を見る。

「もうすぐ12時だね」

そう言った数十秒後、大きな鐘の音が鳴り響いた。

「メリークリスマス」

「メリークリスマス」

「メリークリスマス」

人々がみんなそう言っていた。誰かれかまわず、近くにいる人に明るくメリークリスマスと言い交わす。

「メリークリスマス！ お嬢さんとサンタサン」

いきなり花鈴にそう話し掛けてきた。花鈴はビククリしている。代わりにサンタクロースがメリークリスマスと返した。

「メリクリ！」

「メリークリスマス」

「メリークリスマス」

花鈴はただ戸惑う。サンタクロースは笑顔で言った。

「花鈴もメリークリスマスって言ってあげたらどうですか？」

「私……私は……だって」

「ニッコリ笑ってメリークリスマスって言ってあげればみんな嬉しいですよ」

「そ……それだけで？」

「花鈴もメリークリスマスと知らない人に言われても何だが嬉しいでしょ？ 同じ時間を一緒に過ごしている証です」

「……」

花鈴は今まで感じた事のない感情があった。それはとても心地よく、一人じゃないと思えた。

花鈴は下向きだった顔をあげるとサンタクロースに顔を向ける。

「メリークリスマス」

その笑顔はとても清々しく、心からの笑みだった。

「メリークリスマス」

サンタクロースもそう返すと、花鈴は人の多い所に向かって行っ

た。

人の集まる塊に入り、笑顔でメリークリスマスと言っている。花鈴が言えば皆もメリークリスマスと返し、皆が花鈴に言えば花鈴がメリークリスマスと返した。

そこには暖かい人達、暖かい笑顔、暖かい時間が流れていた。

しばらく経つと自然と人は少なくなって行った。

花鈴はサンタクロースの元に戻った。

「あ……あれ」

確かにいた場所はここなのにそこにはサンタクロースの姿が無かった。花鈴は一気に不安になった。

必死にサンタクロースを探した。でもその目立つ赤い服を探すことはできなかった。

「大丈夫……夫……」

花鈴はまた戻ってしまった。人はいなくなる。ツリーのライトは

消える。

また一人

「大……丈夫……って……何が？　ねえ教えてよ」

寒い

やっぱり私は独りだった。

涙も枯れるほどの心の中にある虚無感

【涙】

テストが終わり、終業式まで休みに入った。

家で一人なにをするでもなく過ごす。今はもう家政婦を雇っていないから家事炊事を自分でしている。

親は たまにしか帰ってこない。帰って来ても会話すらしない。季節ごとに服とかを大量に置いて行ったり、持って行ったりそれだけ。

帰っても私の顔すら見ずに出て行ったこともある。

ワタシトイウソングザイハイッタイナンドロウ ?

そう思い続けるばかりで答えは見つからない。

辛くて悲しくて苦しい。

あの人の言った通り、ずっと変わるのを待ち続けるなら、一生、私は此所にいないといけない。

でも私は私でしかない。

私は今を生きてる。

誰かの為とかじゃなく、自分を生きる為に生きよう。

変わるんじゃない。私は私のままで生きよう。

そんな当たり前の事すら私は長い時間掛かってようやく分かった。

このマスコットのトナカイを見るたびにあの日のサンタクロースの言葉を思い出した。

いずれ必ず向き合える日が来る。

その日の為に

だからこそ

「花鈴？」

隆一を呼び出した。会って話したい事があるとそれだけ言った。

すぐに駆け付けてくれた。

あんな態度をとった馬鹿な私の為なんか

「花鈴が俺を呼び出すなんて初めてやん？ 何かあったん？」

慣れ親しんだ声が聞こえる。

いつもと変わらない表情。

いつもいつも心配そうに私を見ている。

あの人と同じ優しい瞳、私を気遣い口端をあげている。

いつだって

いつだって隆ちゃんは私だけを見ていてくれた

「花鈴……俺、お前に会わん間ずっと考えててな！ やっぱはつきりしよう思ってたんや！ あんな俺……お前に言いたい事があんな！ 俺は……俺は」

少し赤くなる頬。

緊張からか目を合わせない。

いつもと違う態度。

これは私に対する隆ちゃんの気持ち、しっかり受け止めないといけない。

ずっと逃げてた。

向き合わないといけない。

「俺はお前が好きや」

一変して真顔になる隆一。

真っ直ぐ見詰めてくる瞳。

赤く染まった顔。

言わなくちゃいけない。

言わなくちゃ

「ゴメンナサイ」

好きだと言われても何も思わなかった。

ただその好意を重いと感じてしまった私は最低だ

一塵の迷いも無かった。

隆一よりも、真っ直ぐ見詰め返す花鈴、その瞳からは今まで見たことが無い悲しみが映しだされていた。

「……………か。やっぱり……………ダメか」

隆一は苦笑いしながら、しゃがみこんだ。

長く一緒にいた二人。

花鈴が隆一を分かるように、隆一も花鈴の事が分かる。

でもそれでも気持ちは本当だからこそ、隆一は花鈴に想いを伝えた。

返される言葉、気持ちが分かっている

「今まで隆ちゃんが私の傍にいてくれた事すごく……………すごく感謝してます。ありがとうございます」

花鈴が悲愴に顔を歪ませる。

「でも……私は隆ちゃんをどうしても愛せない」

「……………どうして？」

「隆ちゃんは私と違いすぎる」

「違って当たり前やん。同じ人間なんかおらん」

「違うのは環境よ」

「……………」

「あなたには暖かい家族、暖かい友人、暖かい心を持ってる」

花鈴がうつ向く。

「だからあなたには私の気持ちが分からない。私はあなたを妬む気持ちや……憎む気持ちがどこにある。……隆ちゃんは嫌いじゃない……でも……好きでもないわ」

とても冷たい。

傷つける言葉だと分かっている。

でもこれが本心。

今まで逃げてた。ぶつからなかった。

隆一と本心で向き合う事がこんなに辛いとは思わなかった

「……………私……………好きな人が……………気になる人がいるの」

「そ……………うか……………そうやったんか。俺の知つとるやつか？」

「隆ちゃんの知らない人よ。私も全然知らない」

「……………ハッ？ 何言うてんの？」

隆一が立ち上がると首をかしげる。

花鈴は少し目線を下げると、ハアと息をつき言った。

「名前も素顔も知らない人よ。去年のクリスマスに会った街角にいたサンタクロースよ」

啞然としながら隆一は更に首をかしげた。

「い……今までの中で一番オモロイ話やけど……マジで言ってるんか？」

花鈴は無言。

花鈴の性格を知っている隆一はその態度で冗談も嘘も言っていないと察知する。

「な……んで？ そんなやつのが好きやねん！ 名前も素顔さえ知らんのやろ？ 花鈴！」

隆一は花鈴の腕を掴むと、堰を切ったように問う。

花鈴は横を向いて、目線を合わせない。

「あなたには分からない……私は……私はあの人が好きなのよ。ずっとずっと……あの日からあの人を想わない日は無かったわ。だってあの人はずっと一人だった私と初めてクリスマスを過ごしてくれた人だもの」

「たった……それだけ？」

バシッ

花鈴が隆一の手を叩きはらい、睨み付けた。

「そうよ…… たったそれだけよ。でも私にとってはとても大きなものだったわ！ あなたには分からない！！」

誕生日だって

お正月だって

一緒に過ごしたことなんかない。
いつもいつも一人で寂しかった

自分の誕生日を祝って貰えないのは辛かった。でも家政婦さんがその日だけはケーキを買って来てくれた。優しくしてくれる人がまだ誕生日にはいてくれた

一番寂しい日はクリスマスだった。

周りはサンタクロースからプレゼントを貰って楽しそうで嬉しそうで

何で私にはサンタクロースが来ないんだろうと思った。

ずっとずっとサンタクロースを待っていた。

私の私だけのプレゼントが欲しかった。

クリスマスは家政婦さんも家族と過ごす為に、すぐに帰った。

サンタクロースなんていない。

サンタクロースが親だと知った時、幼かった私がどれだけ傷ついたか

ダカラワタシノトコロニハコナカタノカ

「隆ちゃんなんかには分かんない！ 分かるわけない！」

息を切らして怒鳴る花鈴。

隆一は今まで見たこと無い花鈴の悲痛な叫びを聞き、顔を歪ませ小さくゴメンと言った。

しばらく沈黙は続き、落ち着いた花鈴がポツリポツリ話し出す。

「私は一人だったから……あの日見たクリスマスツリーとたくさんの人達がとても暖かった。貰ったプレゼントも。でもそれはクリスマスだけ……一瞬だけの暖かさだった。私は愚かだからまた戻ってしまった。人を人と見ない無感情の自分に……」

雪が振り始めた。

「でもクリスマスが近づくにつれ……思い出す……やっと私は……分かり始めた。親が全てじゃない。向き合うとは何か……私はやっぱり……隆ちゃんが好きだよ」

ポタ

花鈴の目から涙が溢れた。

「寂しくて辛い時……隆ちゃん的笑顔で救われた事がいっぱいある。隆ちゃんがいてくれたから私は……今までの此所にいられた。でも私

は……私は隆ちゃんみたいに人を好きになりたい。自分を生きたい。生きる為にも隆ちゃんと本心で向き合いたかった。酷い事言ってゴメンナサイ……ゴメン……ナサイ」

「花鈴……名前すら知らんそいつが……そんなに好きなんか？」

「分から……ない。でも今はあの人の事が知りたい。あの人に会いたい」

「俺と会えんくてもそうは思わんかったんや？」

「ゴメ……ンナ……サイ」

「……好きや。好きやずっとずっと好きやった」

「あり……がと。ありがとう隆ちゃん」

「俺は花鈴を愛してる。だから花鈴が幸せになってくれる事が一番の願いや。相手が誰であろうと構わん。俺はこれからも花鈴の友人やからいつでも何でも言うてや！ それくらいエエやろ？」

「……う……ん。うん。あり……がと。隆ちゃん……こんな私の側にいてくれて」

隆一は泣く花鈴を抱き締めた。

「俺こそ……何もできんかって……気持ちすら分かれんでゴメン」

花鈴は首を横に振る。

「ほんまに……好きや……好きやった花鈴。花鈴……頑張りや」

繰り返し隆一は頑張れと言った。

本当に好きだった。同情でも哀れみでも本当に好きだった。

ありがとう隆ちゃん

こんな私の側にいてくれて

隆ちゃんは私にとって一番大切な友人です

これからずっと

【Merry Christmas】

2007年12月24日

去年のクリスマスからずっとあの人を探していた。

今まで見ようとしなかった行き交う人の顔を目で追い、あの人かも知れないと言う淡い気持ちを胸にずっと探していた。

でもたくさんの人達の中で、名前も素顔も知らないあの人を探す事は出来なかった。

もう二度と会えないと諦めてしまった。また下を向き、たった一人だと思い込み、声を掛けてくれる人と向き合う事すらしない。

あの人と言った言葉を思い出せば苦しくて悲しかった。

大丈夫 そう言ってくれた言葉にしがみついて、もう一度会いたいと願っては諦めた

『花鈴』

私を見て嬉しそうに笑う隆ちゃんとどう向き合えば良いのか分からなかった。

向き合うのに時間が掛かった。

隆ちゃんは分かってくれたと思う

『頑張りや』

どんな時でも私の味方でいてくれる。

ずっと変わらない隆ちゃん。

ずっと友人だと言ってくれた優しい人。

ありがとう

私はもう一人じゃない

だから恐れずに

「行くっ」

前を向いて、歩き出す。

結局私は忘れる事なんて出来ない。

あの人に会いたい

もう一度会いたい

もう一度

花鈴は立ち上がり、家を出た。去年は泣いて飛び出した。

でも今は違う。自らの意思で歩き出す。

去年と同じ、X・m a s。

街は華やぎ賑わう。目につく赤い衣装。流れるクリスマスソング。
変わらない幸せそうな人々。

同じ

「……………」

でも去年いた場所にサンタクロースはいなかった。

期待していただけにガッカリする。

「…………諦めちゃダメ」

花鈴はギュッと拳を握ると、顔をあげてサンタクロースが去年プレゼントを渡していた場所に佇む。

来るか分からないサンタクロースを出会った場所で待つことにし

た。

目の前ではたくさんの人が行き交う。

子供と手を繋いでいる家族、腕を組み幸せそうな恋人、プレゼントを抱えて早足で通りすぎる人。

花鈴はそんな人達の中で、サンタクロースを待ち続ける。

何分、何十分、何時間。

無情にも時間だけが過ぎる。

それでも花鈴は帰ろうとしない。寒さで顔色の血は引き、体が力タカタ震えている。

「…………ツ」

花鈴の心が挫けそうになった。

弱気になるなと自分を励まし、更に時間は過ぎ去る。

「……………お願い。お願いあの人に……………会わせて」

花鈴は手を組むと、口に押し当てた。神に祈りを捧げるように必

死に願った。

あの人に会いたい

お願い会わせて下さい

「……………こんばんわ」

声を掛けられ、バツと顔をあげた。懐かしい声

「あつ……………」

目の前にはマフラーを巻いた長身の男がいた。

優しい瞳、優しい声、優しい笑顔。

花鈴は言葉を無くし、佇む。

男がクスツと笑う。

「去年と逆ですね。すぐに分かりました」

花鈴はハツと我に返ると、緊張で高鳴る鼓動を必死に静めようと、落ち着け落ち着け落ち着けと心の中で唱えた。

「まさか……また会えるなんて思いませんでした。去年のX'masは、友人の代わりにプレゼントを配ってただけですから……でもどうしたんですか？ その格好」

「こ・これは」

頭から足まで赤に包まれていた。

それは紛れもなく、サンタクロースの衣装。

首から紐に通したトナカイのマスコットが下がっていた。

道行く人はどうしたって花鈴の目立つ服に目を向けてしまう。
その効果は目の前に

「私……」

スウツと深呼吸すると、男に向かってビシツと指を差した。

「サンタクロースに何か願い事は無い?!」

何時間も寒空の下で待っていた花鈴の鼻は真っ赤だった。

去年とは微妙に違うが、彷彿させるその言動に男は一瞬驚くとフツツと笑った。

「恋人？」

男が半分冗談に聞くと、花鈴は真顔で見詰めながら手を下ろした。

「X・m a s……だけ？」

花鈴が弱々しく訊ねると、男は首を傾けながら、今と今までの想いを話だした。

「去年の……X・masに会った女の子はどうしてるかな？ 時々思い出しては気になってました」

男は目を伏せる。

「フツとあなたの事を思い出し、何となく、ここに足が向いていました。……去年、彼処で会ったなとしたら赤い服を着たサンタの女の子がいるなって見ていました。……よく見たら去年会った花鈴だと分かりました。だから声を掛けました」

男はただ偶然この近くにいて、去年の事を思い出し何となくここに来たと説明する。

「私は……ずっと……貴方を待っていた。このトナカイを見るたびあなたの言葉を思い出した。私は私を変えない。けどもう親や周りが変わるのを待つのは止めたの」

「そうですか」

「私は……貴方が好きなんだと思う。ずっとずっと貴方に会いたかった」

ポタッ

花鈴の目から涙が流れた。

去年と違う。

悲しいから泣いてるんじゃない。

会えた嬉しさで自然と涙が溢れた。

「花鈴……」

男がハンカチを取り出すと、花鈴の目にあて涙をぬぐう。

「花鈴、今すぐ本当の恋人になるのは無理です。お互いを知らなさ
するから……でも」

男が花鈴に手を差し伸べる。

「今日はX・mas。サンタクロースにお願いをしても良いですか
？」

「はい」

「恋人になって下さい。サンタクロースが恋人なんて素敵ですから
後もう一つ」

「？」

「出来れば友人からお互い分かりあい仲良くしていきませんか？
俺の名前は静岡聖です」

花鈴は涙でグシャグシャな顔をハンカチで隠しながら顔を上げた。

また会えた喜びと、これからもずっと会える嬉しさ。

男の言葉に花鈴はまた涙が溢れた。

「わ・私は春山花鈴です」

会いたくても会えなかった。

何度も諦め、でも無意識にすれ違う人を目で追い掛け、会いたい
想いは募るばかり

好きなんだと自覚するのが遅くて、また時間を無駄に過ごした。

私は一人じゃない。

一人にはなれない。

それが分かった時、ようやく向き合えた。

私はもう一人じゃない。

これからもずっと。

Merry Christmas .

【Merry Christmas】（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

こんな稚拙でシヨバイ小説ですみません。

こんなあやふや構成な小説で本当に申し訳ありません！！

この後は多分、花鈴は幸せになると思います。隆一はモテるけど花鈴が好みだからきつと良い子と付き合うと思います（ ）b

隆一とくつつけようかなあと途中思いましたが《サンタクロースが恋人》の題名の為に断念しました。

わけわかない小説だと思います。表現も下手ですみません。

これから頑張りますので宜しくお願い致します。

本当に読んで下さり感謝致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0551d/>

サンタクロースは恋人

2010年10月10日02時26分発行